

国立国語研究所学術情報リポジトリ

Definite and indefinite noun-phrases in Indonesian : compared with Japanese

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-06-13 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 正保, 勇, SHOHO, Isamu メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00001332

インドネシア語の定名詞句と不定名詞句

——日本語との比較を通して観た——

正保 勇

SHOHO Isamu : Definite and Indefinite Noun-phrases in Indonesian.

——Compared With Japanese——

要旨：武田修一（1979）によれば、英語の不定名詞句は、三つに分類されるという。即ち、特定の不定名詞句、非特定の不定名詞句、それに記述的不定名詞句の三つである。武田修一の定義によれば、特定の不定名詞句とは、その指示対象の存在が人物Xによって信じられており、かつその指示対象が人物Xにとって認知可能であるような不定名詞句を指し、非特定の不定名詞句とは、その指示対象の存在が人物Xによって言じられていないか、又は、信じられていても、その指示対象が、人物Xにとって認知不可能であるような不定名詞句を指す。記述的不定名詞句とは、その指示対象の存在が合意されないような使い方の不定名詞句を指す。武田修一の理論によれば、この不定名詞句の三分法は、定性に関する適切な定義が与えられれば、定名詞句にも適用できると考えている。もし、武田の提案する不定名詞句の三分法を基礎として、定名詞句を分類し直すと、Donnellanの言う指示的定名詞句は、特定の定名詞句として分類される。又、Donnellanの言う限定的定名詞句の一部は、非特定の定名詞句として分類され、一部は、記述的定名詞句として分類される。本論では、武田修一の三分法を比較のための枠組みとして利用し、不定名詞句、及び定名詞句の三類型に意味の上で対応するものが、日本語、及びインドネシア語で、どのような型で顕現するかを考察すると共に、日本語とインドネシア語の不定名詞句、及び定名詞句の持つ特殊性についても探るつもりである。

キーワード：不定名詞句、定名詞句、特定、非特定の、記述的、指示的、限定的

Abstract : TAKEDA Shuichi proposed that indefinite noun-phrases should be divided into three categories : 1. that of the specific indefinite noun-phrase : when the object's existence is accepted as true and can be known by the subject; 2 : the non-specific indefinite noun-phrase : when the object's existence is not accepted as true, or even if its existence is accepted, the object cannot be known by the subject; 3 : the descriptive indefinite noun-phrase : the object's existence is not entailed or necessarily involved.

TAKEDA also proposed that the trichotomy found in the indefinite noun-phrases could be applied to definite noun-phrases as well, if only an appropriate definition of "definiteness" be given. Based on this theory, Donnellan's referential definite noun-phrases can be reclassified as specific definite noun-phrases. On the other hand, a part of Donnellan's attributive definite noun-phrases can be reclassified as non-specific definite noun-phrases, and the remaining part as descriptive definite noun-phrases.

Making use of TAKEDA's classification as the framework for a comparative study, we investigated the categories of each group of noun-phrases in Japanese and Indonesian. At the same time we determined the characteristics of the definite and indefinite noun-phrases in Japanese and Indonesian.

Key words : indefinite, definite, specific, non-specific, descriptive, referential, attributive

1. 英語の不定名詞句

1.1. 特定の及び非特定の不定名詞句

英語の不定名詞句は、前後の文脈を捨象して考えた場合、その指示対象の特定性に関して、曖昧さが伴うことがある。例えば、次の文における不定名詞句の 'a motorcycle' の指示対象は、特定のオートバイを含意する場合と、特定のオートバイを含意しない場合の両様の解釈を許す。

(1) Melinda wants to buy a motorcycle.^{注1)}

そして前者の解釈となる場合には、例えば次の(2)の文をこれに続けることができる。

(2) Se will buy it tomorrow.^{注2)}

これに対して、後者の解釈となる場合には、例えば次の(3)の文をこれに続けることができる。

(3) She will buy one tomorrow.^{注3)}

このような、不定名詞句の指示対象に関する曖昧性は、通例、特定性の相違によるものであるという説明がなされる。

しかし乍ら、どのような場合に、不定名詞句は特定のとなり、どのような場合に非特定のとなるかという問題、即ち、特定性の定義を巡ってさまざまな意見がある。例えば、Ioup (1977) によれば、指示対象が話者にとって認知可能な不定名詞句は特定のであり、指示対象が話者にとって認知不可能な不定名詞句は非特定のであるという考えをとっている。これとは違って、Partee (1972) では、話者の主要な関心が特定の物体そのものにあると解釈される不定名詞句は特定のであり、話者の主要な関心が物のタイプ又は類にあると解釈される不定名詞句は特定であるという考えをとる。又、D. J. Peterson (1975) は、上記のいずれとも異なる定義を採用している。即ち、話者がその指示対象の存在を信じていると考えられる不定名詞句は特定のであり、話者がその指示対象の存在を信じていないと考えられる不定名詞句は非特定の

であるという考えをとっている。

武田修一（1987）では、これらの三つの定義のうち、Ioupの定義に賛同し、残りの二者にはいずれも問題点があるとしている。以下、武田修一の説に従って、Partee（1972）とD. J. Peterson（1975）の定義に関する問題点を観てみることにする。

まずParteeの定義に関する問題点から観てみる。Parteeの採用する定義で注意すべき点は、非特定の名詞が特定の物体の存在を含意することもあり得るということである。例えば、次の文で、‘doctor’は明らかに特定の医者を指していると考えられるが、話者の主要な関心は、武田修一も主張するように、医者である特定の人物そのものに向けられているのではなく、「医者としての能力、又は資格をもった人物」、即ち「医者というタイプ、又は類に属する人物」に向けられている。従って、Parteeの定義によれば、‘a doctor’は非特定のであるということになる。

- (4) I heard that from a doctor. That's why I'm inclined to take it seriously.

しかし乍ら、もしこのParteeの特定性に関する定義を採ると、次の例のように、指示的に透明な環境に埋め込まれた不定名詞句も特定性に関して曖昧になり得る。

- (5) I heard that from a doctor.

そうなると、次のかなり一般性の高い原理を放棄しなければならない。

- (6) 不定名詞句が「特定性」に関して曖昧となるのは、それが指示的に不透明な (referentially opaque) 環境に埋め込まれている場合である。武田修一によれば、これは臨ましい帰結ではなく、(5)の不定名詞句に係わる曖昧性は、不定名詞句の特定性に起因するものではなく、話者の心的態度にかかわる、プラグマティックな不確的要素に起因するものであるとしている。即ち、(5)の不定名詞句を曖昧にするのは、文内の不確定要素のためではなく、

語用論的な文外の不確定要素のせいであるとしている。ここで文内の不確定要素というのは、「未来性」(futurity), 「否定」(negation), 可能性 (possibility) 等の意味要素のことで、これらの意味要素を含む環境に不定名詞句が置かれると、不定名詞句は非特定の解釈がなされるか、特定の解釈以外に、非特定の解釈も許されることになる。例えば、次の(7)における ‘a tricycle’ は特定の解釈の外に非特定の解釈も許す。これは、この不定名詞句が、「未来性」を含む語である ‘will’ の作用域の中に置かれているために、この名詞句が特定性に関して曖昧となるからである。

(7) Jessica will buy a tricycle tomorrow.

又、次の(8)においては、文中の不定名詞句である ‘a book’ は唯一的に非特定の解釈を受けることになる。これは、不定名詞句が「否定」の意味を持つ不確定要素である ‘not’ の作用域の中に置かれているからである。

(8) Jessica did not read a book yesterday.

次の(9)においては、不定名詞句の ‘tricycle’ は(7)の場合と同様に、特定の解釈の外に非特定の解釈も許す。これは、この不定名詞句が、「可能性」を含む語である ‘believe’ の作用域の中に置かれているからである。

(9) Kitty believes that jessica bought a tricycle.

しかし、武田修一が主張するように、不定名詞句を非特定にする要因は、先程の三例に見られたような文内の不確定要素のみではなく、文外にも語用論的な不確定要素が存在する場合がある。

次の二文は、共に、文中にいかなる不確定要素も含んではない。又、両文共、存在の一般化が成立し、特定の物体の存在が含意されている。

(10) Jessica is reading a letter.

(11) I talked with a logician.

そして、両文中の不定名詞句である ‘a letter’, ‘a logician’ の指示対象について、話者がそれを認知することが可能であれば、これら両不定名詞句は特

定的であるとみなせるが、状況によっては、話者がこれらの不定名詞句の指示対象を認知することが不可能な場合もある。例えば、ジェシカが或る本を読んでいることを人から伝え聞いた人物が(10)の文を言うような場合には、話者はジェシカが読んでいる本を認知することはできない。又、論理学者と称する未知の人から電話を受けた人物が(11)の文を言うような場合にも、話者は電話の主である論理学者を認知することはできない。武田修一は、このような状況で(10)や(11)が発話される場合には、‘a letter’や‘a logician’は非特定のになると述べている。そして、このような場合、‘a letter’や‘a logician’を非特定のにする要因は、文内にあるのではなく、文外の語用論的要素がこれに関わっていると述べている。従って、この武田修一の論によれば、一般性の高い原理である(6)を放棄する必要はなく、この原理をそのまま保持したままで、これを補うものとして、次の文外の不確定性要素に関する原理を追加すれば足りるとしている。

(12) 文中の不定名詞句について、文中そのものの中に不確定要素が含まれていなくても、文外に不確定要素が存在し、問題の不定名詞句がその作用域内であれば、その不定名詞句は特定性に関して曖昧となる。

この原理によれば、(10)における‘a letter’が非特定のとなるのは、文内の不確定要素のためではなく、文外の不確定要素である「伝聞」や「非近親性」によるのであるとしている。そして、(10)、(11)の文外の不確定要素の作用域にある不定名詞句の場合と、前述の(4)における不定名詞句(a logician)とを同様に扱うことはできないとしている。武田修一によれば、非特定性を決定するのは、話者の認知不可能性であるという。この説に従えば、(10)と(11)における不定名詞句は、前述したような文外の不確定要素の作用域にある場合には、話者はその指示対象を認知し得ないことになるので、これらの不定名詞句は非特定という解釈を受けるそとなる。これに対して、(4)における‘a logician’の指示対象を話者は認知することができるので、こちらの不定名詞句

の方は特定のという解釈を受けることになる。(4)においては、Parteeが主張するように、話者の主要な関心が指示対象そのものよりも、指示対象が属する職種或いは、指示対象の職業上の資格に置かれているが、これは、不定名詞句を非特定にする要因、即ち話者の認知不可能性とは無関係である。

次に、武田修一(1987)に従って、D. J. Petersonの特定性に関する定義の問題点についてみてみることにする。先述したように、D. J. Petersonは、話者がその指示対象の存在を信じていれば、その指示対象を示す不定名詞句は特定のであると考えている。しかし、この定義に従えば、指示的に不透明な環境に置かれた不定名詞句が、唯一的に特定のな解釈を受けるという事態が生じることがある。例えば、次の文で、‘a dragon’という不定名詞句は、‘believe’という文内の不確定要素の作用域に入っているので、この不定名詞句は(6)に従えば、特定性に関して曖昧となるはずであるが、D. J. Petersonの定義では、話者が不定名詞句の指示対象の存在を信じていると考えられるので、この不定名詞句は唯一的に特定のとされる。

(13) I believe that a dragon ate my cookies.

次にIoupの説における問題点について観てみる。Ioup(1977)は、次の文における不定名詞句は、指示対象そのものが問題にされている場合と、指示対象が属するタイプ、又は類が問題にされている場合とがあり得るとしている。

(14) I talked with a logician.

そして前者の用法における不定名詞句は、次の(15)における定名詞句の指示的用法に対応するものであり、後者の用法における不定名詞句は、次の(16)における限定的用法に対応するものだと考えている。

(15) The woman was driving the car and she conducted all the negotiations and did the registering. (Gardner, The Case of the Lazy Lover, p. 36)

(16) The dragon which ate my cookies must be very big.^{注4)}

(15)における定名詞句の‘the woman’に関して、話者はある特定の人物を想定しているのに対して、(16)における定名詞句の‘the dragon which ate my cookies’に関しては、話者は特定の生き物を想定しているのではなく、「名詞句が表す記述に合う生き物がいればその生き物は」という意味を表している。(14)の不定名詞句の特定用法は、それによって話者が特定の人や物を想定しているという点において、今述べた定名詞句の指示用法と共通性を有すると言える。(14)の不定名詞句の非特定用法は、「不定名詞句が表すタイプ又は類に属する一人が」という意味を表しているのであって、話者は特定の人や物を想定しているのではない。この点において、(14)の不定名詞句の非特定の用法は、定名詞句の限定的用法と共通性を有すると言える。

そして、このような考えに立つと、Partee (1972) の場合と同様、指示的に透明な環境に置かれた不定名詞句がその特定性に関して曖昧となることがあるということになるので、一般性の高い原理である(6)を放棄せざるを得なくなるという問題を生じる。

武田修一によれば、Ioupの説のもう一つの問題点は、Ioupが特定性という概念を定義するにあたって、誰にとって特定のであるのかという観点が欠落していることであるという。Ioupが仮定している特定性の定義に従えば、(17)の例における不定名詞句‘a book’は二通りに曖昧であると予測されるだけである。即ち、(18)と(19)の解釈のみが可能であると予測する。

(17) John is looking for a book.

(18) There is a book wich John is looking for.

(19) John is looking for a book, any book.

しかし乍ら、もしPalacas (1977) でなされているように、特定性という概念に、誰にとって特定のであるのかという観点を付け加えて考えると、不定名詞句‘a book’の解釈は次に述べるような三通りになる。

(20) John is looking for a book, any book.

(21) John has a certain book in mind and is looking for it.

(22) I have a certain book in mind that I know John is looking for.

武田修一は、以上のようなIoupの特定性に関する定義の不備な点に対する批判を踏まえて、次のような代案を出している。

(23) An indefinite noun phrase is specific for a person if by its use the speaker refers to a particular object or individual such that the person has it or him in mind.

On the other hand, an indefinite noun phrase is non-specific for a person if by its use the speaker does not refer to any particular object or individual such that the person has it or him in mind.^{注5)}

以上、三人の学者の特定性に関する説に対する武田修一の批判を観てきたが、武田修一の説で重要な点をまとめてみると次のようになるであろう。先ず第一に、武田修一は、不定名詞句の特定性／非特定性を決定するのは、ある人物にとってその指示対象が認知可能であるかどうかというクリテリオンであるとしている。第二に、この特定性／非特定性という概念は相対的性格のものであり、誰にとって特定のであるか、或は非特定のであるのかという観点が常に考慮されなければならないとしている。第三に、武田修一は、一般性の高い原則(6)を保持し、この原則に対する一見反例と思える事例を説明するのに、(12)のような語用論的曖昧性に関する原則を立てている。(12)を次に再掲する。

(24) 文中の不定名詞句について、文そのものの中に不確定要素が含まれていなくても、文外に不確定要素が存在し、問題の不定名詞句がその作用域内にあれば、その不定名詞句は特定性に関して曖昧である。

この原則により、次の文が、もし話し手が電話を通して医者と称する未知の

人物からその事を聞いたという状況の下で発せられたとすれば、文中の不定名詞句 ‘a doctor’ は、文外の不確定要素である「非近親性」によって非特定のとなる。

(25) I heard that from a doctor.

しかし、武田修一は、文内の不確定要素に関する次のような原則を保持する立場をとっている。

(26) 確定的な文脈に埋め込まれた不定名詞句は、唯一的に特定のであると見なされるが、不確定的な文脈に埋め込まれた不定名詞句は、特定性に関して曖昧である。

又、武田修一は、特定／非特定性を決定するのは、ある人物にとっての認知可能性もしくは不可能性であるという考えに立っている。(26)の原則と、今述べた特定性に関する前提から、次のいずれの状況下で(25)が発話されても、不定名詞句の ‘a doctor’ は特定のと解釈されることになる。

(イ) 話者はある特定の医者进行想定している場合。

(ロ) 話者はある特定の医者を知っているが、話者の関心は、その人物そのものに向けられているのではなく、医者としての能力或は資格に向けられている場合。

1.2. 記述的不定名詞句

不定名詞句は、(27)のように、現実世界の事物を指示対象とすることもできるが、(28)のように蓋然世界の事物を指示対象とすることもある。

(27) She is worried about our daughter, who went to the moonlet for the day with an active flight officer.(Vogt, Children of Tomorrow, p. 97) (下線筆者)^{注6)}

(28) There are also plans to launch a small Pioneer satellite that would fly past Mars and continue off into space until it reached the planet Jupiter. (U.S. News & World Report, January

1973, p. 15) (下線筆者)^{注7)}

しかし、不定名詞句は、この外に、いかなる世界の事物をも指示対象としない用法がある。例えば次の(29)や(30)における不定名詞句の用法がそれである。

(29) Patricia is beautiful like a rose. (下線筆者)^{注8)}

(30) Nanny is writing a letter. (下線筆者)^{注9)}

(29)における‘a rose’は、現実世界にも、蓋然世界にもその指示対象が存在せず、唯単にパトリシアの目を瞞るような美しさを形容するのに使用されているだけである。(30)における‘a letter’も、手紙を書いている最中には未だ存在していないものであり、‘is writing a letter’全体で、手紙を書くという活動に従事しているということを表すために使用されているにすぎない。

不定名詞句には、又、次の例におけるような総称的用法もあるが、この用法の不定名詞句は現実世界にも、蓋然世界にもその指示対象を持たないという意味では、(29)、(30)の例と同じ性格のものであると考えられる。

(31) A tricycle has three wheels.

この総称的用法の不定名詞句は、事物の集合の任意の構成員を指示するのに使用されているという点において、次の(32)における非特定用法の不定名詞句と共通性があるところから、総称用法の不定名詞句を、非特定用法の不定名詞句の一部に含めようとする考えも成り立つ。

(32) Nanny wants to buy a tricycle, and she will buy one tomorrow.

しかし、この説に対して、武田修一は反論を唱えている。武田修一は、(32)の場合には、もしナニーが三輪車を買うことができた時には、特定の三輪車とその時点で存在することになるが、(31)の場合には、いかなる世界にも指示対象が存在しないという相違点があると指摘している。又、anyとの共起に関しても、総称不定冠詞と、非特定の不定冠詞との間には相違があるという。

次の例が示すように、総称的不定冠詞の a は否定辞を伴わずに any と共起できるのに対し、非特定の不定冠詞の a はそのままでは any と共起することが

できず、否定辞の支えが必要である。

(33) A beaver with any brains builds dams.

(34) *I am looking for a doctor who has any brains.

(35) *I want to meet a doctor who has any brains.

更に又、非特定の不定名詞句は限量詞として機能するが、総称不定冠詞の a は、限量詞としては機能しないという相違点があるという。

武田修一は、次の(36)が持つ二つの解釈は、(37)のような論理的表記によって表せるところから、特定の不定冠詞も非特定の不定冠詞も共に限量詞として機能すると主張している。

(36) John wants to catch a fish.

(37) a. $\exists x$ (x is a fish and John wants to catch x)

b. John wants ($\exists x$ (x is a fish and John catches x))

‘a fish’が特定の不定名詞句として解釈された場合の読みは、(37)の a によって与えられ、‘a fish’が非特定の名詞句として解釈された場合の読みは(37)の b によって与えられている。次の(38)のような総称不定冠詞を含む文は、普遍限量詞を用いた(39)のような論理形式を持っていると考えられる。

(38) A beaver builds dams.

(39) For any x, if x is a beaver, then x builds dams.

又、Perlmutter (1970) でも主張されているように、総称不定冠詞の a は、any と統語的に同じ分布を示すことが多い。以上のことから、総称不定冠詞の a も、前記の特定の及び非特定の不定冠詞と同じく、限量詞として機能すると言えそうであるが、これは実は正しくない。

総称不定冠詞の a は、常に any と統語的分布を等しくするわけではなく、次の例のように、総称不定冠詞の a を any で置き換えることができないこともあるし、反対に、any を総称不定冠詞の a で置き換えることができない場合もある。

- (40) a. ? A businessman drives fast. ^{注10)}
 b. Any businessman drives fast. ^{注11)}
- (41) a. A whale, which is a mammal, suckles its young. ^{注12)}
 b. *Any whale, which is a mammal, suckles its young. ^{注13)}

以上述べたような根拠に基づいて、武田修一は、総称不定冠詞の a を非特定不定冠詞の a の用法の中に包摂することはできないとしている。そして武田修一は、総称不定名詞句は、現実世界にも、蓋然世界にもその指示対象を有しないという点で、次の例における不定冠詞と共通するものがあると述べている。

- (42) Clifford is a training instructor of the Space Academy. ^{注14)}
 (43) Marshall is nothing of a poet.
 (44) Chris is now writing a letter in her room.

上記の例に現われる不定冠詞は、不定単数を標示するだけの働きをしているにすぎず、総称不定冠詞と同様に、限量詞としての機能を有してはいない。これらのことから、武田修一（1981）では、総称不定冠詞の a と、(42)から(44)に現れた不定単数標示としてのみ機能する不定冠詞の a を記述的不定名詞句という名称の下に統括している。

2. 英語の定名詞句

Donnellan (1971) によれば、定名詞句には二通りの用法が可能であるという。一つの用法は、聞き手が何について話されているのか了解できる物について話し手が何かを述べようとする際に用いられる定名詞句の用法である。もう一つの用法は、ある記述を満たす物について何かを述べようとする際に用いられる定名詞句の用法である。Donnellan は、この定名詞句の前者の用法を指示的用法 (referential use) と呼び、後者の用法を限定的用法 (attributive use) と呼んでいる。Donnellan (1971) の定名詞の二用法に関する定義を下に引用する。

(45) Referential Use :

A speaker who uses a definite description referentially in an assertion uses the description to enable his audience to pick out whom or what he is talking about and states something about that person or thing. (Donnellan (1971), p.102)

(46) Attributive Use :

A speaker who uses a definite description attributively in an assertion states something about whoever or whatever is the so-and-so.

この定名詞句の二用法を説明するのに、Donnellanは、次のような文を挙げている。

(47) Smith's murderer is insane. (Donnellan (1971), p.102)

Donnellan(1971)によれば、この例における定名詞句の'Smith's murderer'は二通りに解釈できるという。第一の解釈は、例えばJonesという男がSmithを殺した上で裁判にかけられているような状況で、Jonesの裁判所での奇妙な言動について述べているというような背景を踏まえてなされる解釈である。この場合には、もし誰かが、定名詞句によって指される人物は誰のことかと問えば、話し手は、それはJonesのことであると答えることができる。つまり、このような定名詞句の用法においては、話し手は、ある特定の人や物を想定していると言える。第二の解釈は、例えば、Smithなる人物が無残にも殺されるという事件に遭遇して、あんなにいい奴だったSmithをこんな残忍な方法で殺すなんてという慨嘆の気持ちを込めてこの文を言っているというような背景を踏まえてなされる解釈である。そして、この場合には、話し手は、先程の場合のように、Smithを殺したある特定の人物を想定してこの文を言っているわけではない。

もしスミスは実際には殺されたのではなく、自殺したのだということが明

らかとなったと仮定してみよう。このような場合でも、最初のケースにおいては、‘Smith’s murderer’は Jones を指示し得る。つまり、このケースにおいては、‘Smith’s murder’は単に話題にしようとしている Jones を指すための一手段にすぎないからである。これに対して、第二のケースでは、「精神が異常である」という属性を帰すべき人物が見当らないことになる。つまり、このケースにおいては、「スミスを殺害した」という記述に今う人物が居て初めて、その人物に対して「精神が異常である」と言うことができることになる。

3. インドネシア語の不定名詞句

3.1. 助数詞が付加されたもの

インドネシア語では、助数詞が英語の不定冠詞のように機能する場合がある。例えば、buah という助数詞は、家、建物、船、艇、町、都市等を数える際に用いられる助数詞であるが、これに「一つ」の意を表す前接的な数詞である se- を付加した形の sebuah は、それに後続する名詞句と共に、特定の不定名詞句を作る。例えば、次のような指示的に透明な環境に置かれた ‘sebuah buku’ によって、話者はある特定の本を想定している。

- (48) Seorang murid sedang membaca sebuah buku. ^{注15)}
一人 生徒 ~している最中 読む 一冊の 本

(一人の生徒が或る本を読んでいる。)

- (49) Di jok mobil itu terlihat sebuah kotak kaset. (Intisari No.
~に 座席 自動車 その 見えた 一個の 箱 カセット

312, p. 72)

(その自動車の座席には一つのカセット・ケースがあるのが見えた。)
しかし、次の文のように、不透明な指示的環境の中に助数詞の sebuah が付加された不定名詞句が現れると、それは非特定の解釈を受ける。

(50) Saya mau beli sebuah buku pelajaran bahasa Jepang.
私 ~したい 買う 一冊の 本 学習 言語 日本

(私は日本語の教科書を一冊買いたい。)

日本語においても、助数詞を伴った不定名詞句が指示的に透明な環境の中に現れた時には、特定の解釈を受ける。例えば次の文における「一匹の犬」は、話者の頭の中に想定された或る特定の犬を指示している。

(51) 一匹の犬が私の足に噛みついた。

これに対応するインドネシア語は、次のようになり、「一匹」を意味する ‘seekor’ が付加された不定名詞句は、日本語と同様特定の解釈を受ける。

(52) Seekor anjing menggigit kaki saya.^{注16)}
一匹 犬 噛みつく 足 私

日本語では、次の例に見られるように、ゼロ限定詞が付加された名詞句も、特定の不定名詞句として使用される。

(53) その時路地から突然犬が飛び出てきたかと思うと私の足に噛みついた。これに対して、インドネシア語では、ゼロ限定詞を伴う名詞句が主節の主語となっている場合には、その名詞句は、日本語の場合のように、特定の不定名詞句として解釈されることはない。即ち、(50)における ‘seekor anjing’ を ‘anjing’ で置き換えた次のような文は認められない。

(54) *Anjing menggigit kaki saya.^{注17)}

しかし乍ら、Soenjono Dardjowidjojo (1983) が主張しているように、ゼロ限定詞を伴う名詞句が非総称的動詞の従属節の中に埋め込まれるような場合には、この名詞句は特定の不定名詞句としての解釈を許すことになる。例えば、次のような場合がそれである。

(55) Saya dengar anjing menggonggong.^{注18)}
私 聞く 犬 吠える

(私は犬が吠えるのを聞いた。)

即ち、(53)は次の文と同じ意味を表していることになる。

- (56) Saya dengar seekor anjing menggonggong. ^{注19)}
私 聞く 一匹の 犬 吠える

又、ゼロ限定詞を伴う名詞句が、主語以外の位置に現れる場合には、その名詞句は、特定の不定名詞句としての解釈を許す。次の例では、ゼロ限定詞を伴った名詞句の 'buku' は、'sebuah buku' と同じ意味を表し、全体として前出の(48)と同じ意味を表す。

- (57) Seorang murid sedang membaca buku. ^{注20)}
一人の 生徒 ~している最中 読む 本

(一人の生徒が本を読んでいる。)

又、次の例では、ゼロ限定詞を伴った名詞句の 'anjing' が所謂受動構文の動作主を表す語句の中に表れているが、この場合にも、この 'anjing' は、特定の不定名詞句として解釈され、'seekor anjing' と交換しても文意に変わりはない。

- (58) Kaki saya digigit anjing. ^{注21)}
足 私の 噛みつかれた 犬

(私は足を犬に噛みつかれた。)

次の例においては、'lap', 'sapu', 'sikat' 全てがゼロ限定詞を伴った形で、(57)と同様、目的語の位置に現れているが、これらの不定詞句も特定の解釈される。

- (59) Ia membawa lap, sapu dan sikat. (Intisari No. 313,
彼女 持つ 雑巾 箒 及び ブラシ
p. 68)

(彼女は雑巾、箒それにブラシを持って来た。)

一を表す前接的な数詞と助数詞を伴った不定名詞句は、指示的に不透明な環境に置かれると、非特定の解釈が与えられる。次はその例である。

- (60) Kalau seorang wanita mengalami gangguan reproduksi dan
もし 一人の 婦人 経験する 問題 生殖 及び
kelamin, ia akan datang ke ginekolog.
性 彼女 ~だろう 行く ~へ 婦人科医

(もし或る女性が生殖器官や性器に関しての問題がある場合には、婦

人科医を訪れるだろう。)

- (61) “Pak, kalau besok saya jadi insinyur, bapak
お父さん もし 明日 僕 ~になる 技師 お父さん
akan saya buatkan sebuah rumah……!” (Ketawa Awet
~だろう 作ってあげる 一つの 家
Muda, p. 5)

(「お父さん、もし僕が明日技師になったら、お父さんのために、家を
一軒建ててあげるよ……！」)

これらの両文において、問題となる不定名詞句は、共に不透明な環境を構成する仮定法の文の中に現れているために、非特定のとなっている。

インドネシア語には、これまで述べてきた不定名詞句とは異なり、指示的に透明な環境においても、指示的に不透明な環境においても、常に非特定の不定名詞句として使われる語がある。例えば、*seseorang* や *sesuatu* がそういう類の語である。前者は、日本語の「誰か」に、後者は、日本語の「何か」にほぼ相当する意味を表す語である。次の二例は、*seseorang* の例であるが、最初の文では、*seseorang* が指示的に透明な環境に表われ、二番目の例では、*seseorang* が指示的に不透明な環境に表れている。しかし、どちらの例においても、*seseorang* は非特定の解釈を受ける。

- (62) …meugecek hnbungan bisnis Cory dan apakah ia berutang
調べる 関係 商売 及び ~かどうか 彼 借金がある
pada seseorang. (Intisari No. 312, p. 74)
~に 誰か

(コリーの商売の方はどうなっているかとか、彼が誰かに借金をして
いるかどうかを調べる。)

(63) Seseorang disebutkan menderita AIDS bila bibit penyakit
誰か 言われる 患う エイズ ~ならば 芽 病気

telah nyata-nyata merontokkan daya tahan tubuhnya.
既に 明らかに 壊滅させる 力 抵抗 (彼の)体

(Tempo 30 Januari 1988, p. 88)

(病原菌がその人の免疫を破壊していることがはっきりと症状に現われた時に、その人はエイズに怯えていると言う。)

このseseorangは、殆どの場合、話し手はその指示対象を認知し得ない時に使用されるが、話し手はそれを認知し得ても、その正体についての知識を持ち合わせていないような場合にも使用されることがある。例えば、次の文は、死体が発見された場所に集ってきた群集が語った言葉であるが、この場合、そこに居合わせている群集は、その死体を見ている状況下で、seseorangを使用している。これは、丁度、日本語でも同じ状況下では、「誰かが殺されています」と言うのが普通であって、もし、「或る人が殺されています」と言えば、殺されている人物が誰であるかを知っているにも拘らず、それを伏せていることになり、身元が分からない死体を発見して驚いている人の言葉としては、その場にそぐわない、大変奇妙な言葉として感じられる。

(64) “Seseorang terbunuh dengan tubuh penuh lubang,”……
誰か 殺された ~という状態で 体 一杯 穴

begitu antara lain kata mereka. (Intisari No. 312, p. 72)
そのように 就 中 言葉 彼等

(「誰かが殺されていて、体中穴だらけだ……」というようなことを彼等は言った。)

同じことは、sesuatuについても言える。次の文は、死体が発見された場所で現場検証を行っていた人物が、事件解決に結びつくと思われる或る重大な発見をした時のことを述べた文である。この場合にも、話し手は、その死体発見現場に居合わせているのであるから、当然、話し手は、sesuatuの指示対象を自分の目で見て知っているわけである。しかし、それにも拘らず、ここ

でsesuatuを使用しているのは、新たに発見された事実が多く謎に満ちたものであって、それについて知る事を拒む性格のもの、即ち、話者は、それを認知することはできても、その正体については知り得ないものであるという意味が籠められているからであろう。

- (65) Aku mengitari mayat itu dan kutemukan sesuatu yang
僕 巡る 死体 その 及び (僕は)見つける Ligature
tidak kulihat sebelumnya. (Intisari No. 302, p.72)
Negative (僕)は見る それ以前に

(僕は死体の周りをぐるっと回ってみた、そして、今まで見落としていた何かがあるのに気がついた。)

新しい発見が、更に新たな謎を呼んで、どうしてそうなったのかという問題が、この段階では未解決のまま残っているということが、これに続く部分にはっきりと表れている。その部分を次に引用する。

- (66) Di tempat yang rumputnya roboh rata dengan tanah di
～に 場所 Ligature (その)草 倒れる 平らに ～と 地面 ～に
sisi mayat, tempat tubuh Cory tertelungkup sebelumnya, sebagian
傍 死体 体 うつぶせに それ以前に 一部
besar darah sudah mengering. Namun, ada dua genangan
大きな 血 既に 乾く それでも 在る 二つの 溜ったもの
kecil yang tampak masih basah. Kenapa bukan tiga,
小さな 見える 未だ 濡れている どうして Negative 三つ
tanyaku dalam hati. Padahal ketiga lukanya sama-sama
(僕は)問う ～の中で 心 ～なのに 三つの (その)傷 皆同じに
mengucurkan darah ? (Intisari No. 312, p. 72)
流す 血

(死体の傍の草が地面に倒れている場所、そこは最初コリーの体がつつぶせの状態では横たわっていた所なのだが、そこでは、血の大部分がもう乾いてしまっていた。それでも、未だ濡れているように見える血が溜った所が二箇所あった。どうして三箇所ではないのだろうかと私考えた。三つの傷からは皆同じに血が流れた筈なのに。)

2.2. ゼロ限定詞

既に前節で見たように、ゼロ限定詞が付加された名詞句が主語となった場合、その名詞句が特定の不定名詞句と解釈されることはない。逆から言えば、特定の不定名詞句が主語に立つ時には、数詞、或は数詞と助数詞を組み合わせた限定詞を用いる必要がある。具体例に即して説明してみる。次の例において、‘seorang pencuri’ は、特定の不定名詞句として解釈される。

- (67) Seorang pencuri ditemukan tewas di samping kamar
一人 盗人 発見された 死んだ ~に 傍 部屋
mandi, pertengahan September lalu. (Tempo 10 Oktober 1987,
水浴びする 中旬 九月 去る
(p. 107)

(去る九月の中頃、一人の泥棒が水浴び場の傍で死んでいるのが発見された。)

もし、この文の主語から、‘seorang’ を取って、ゼロ限定詞を付加した形で置き換えると、それは非文となる。

- (68) *Pencuri ditemukan tewas di samping kawat mandi, pertengahan September lalu.

しかし、主語以外の位置では、ゼロ限定詞が付加された名詞句が特定の不定名詞句として解釈されることは可能である。例えば、次の(69)における特定の不定名詞句の‘sebuah buku’ を、‘buku’ で換えた(70)も可能であり、意味は(69)と同じである。

- (69) Bu Wynfeldt meminta tolong suaminya untuk mengambilkan
頼む 援助 (彼女の)夫 (彼女のために)取る
sebuah buku, sementara kedua wanita itu mengobrol.
或る 本 ~の間 二 婦人 その お喋りをする

(Intisari No. 312, p. 73)

(ワインフェルト婦人は夫に本を取ってくれるように頼んだ、その間その二人の婦人はお喋りをしていた。)

- (70) Bu Wynfeldt meminta tolong suaminya untuk mengambilkan buku, sementara kedua wanita itu mengobrol.

又、次の文では、特定の不定名詞句がdenganという前置詞の目的語の位置を占めているが、これらの不定名詞句の限定詞をゼロ限定詞で置き換えることも可能である。

- (71) Waktu ayah datang, aku sudah siap dengan sebuah
 ～時 父 来る 僕 既に 用意ができている ～で 或る
 sekop, gunting kebun dan sebuah mesin peniup sampah
 スコップ 植木鋏 及び 或る 機械 吹く 塵芥
 yang kupinjam dari tetangga. (Intisari No. 312, p. 78)
 Ligature (僕が)借りた ～から 隣り

(父が来た時、僕は、スコップ、植木鋏それにゴミを吹き飛ばす機械隣りから借りたを持ってもう既に準備ができていた。)

次に、ゼロ限定詞が付加された名詞句が、非特定の不定名詞句として解釈される場合について考えてみよう。先に、ゼロ限定詞が付加された名詞句が主語となっている場合、それは特定の不定名詞句とは解釈されないことを見たが、次の例のように、ゼロ限定詞が付加された名詞句が非特定解釈を受けるような場合には、ゼロ限定詞付き名詞句は主語の位置に現われ得る。

- (72) Dan biasanya pula, sopir didawa mutar-mutar dulu,
 そして 通常 又 運転手 連れて行かれる ぐるぐる 先ず
 tak tentu tujuan. (Tempo 23 April 1988, p. 104)
 Negative 定まっている 方角

(そして、これも又通常の手口だったのだが、先ず運転手に当ても無く、ぐるぐる走らせるというものだった。)

この文には、biasanya (通常) という語があるために、ある特定の時に結びついた具体的な出来事ではなく、繰り返し行われる時間的に幅のある出来事を述べているために、その都度運転手は別の人物ということになるので、運転手を特定化することができない。そのため、この環境においては、‘sopir’

は非特定不定名詞句と解釈される。次の例では、‘hantu’ というゼロ限定詞付きの名詞句が二箇所に出てくるが、共に非特定の解釈を受ける。最初に出てくる‘hantu’は、未来を表す指示的に不透明な環境に現われ、二番目の‘hantu’は、否定を表す指示的に不透明な環境に現れている。

(73) Totto dan kawan-kawan menempuh jalan dengan rasa takut
仲間達 行と 道 ~を持って 感じ 恐れ

karena mereka khawatir bertemu dengan hantu di tengah
~なので 彼等 怖がる 会う ~と お化け ~で 途中

jalan walaupun guru sudah menjamin tak ada hantu
~ではあるが 先生 既に 請け合う Negative 居る

sebelum mencapai kuil kuhonbutsu. (Totto-chan, p.63)
~前に 達する 寺

(先生から、九品仏のお寺に着く前にお化けが出ることは絶対ないと
言われていたけれども、トットちゃんと仲間達は、途中でお化けに会
いはしないかと、びくびくしながら道を歩いて行った。)注22)

以上のことから、ゼロ限定詞が付いた不定名詞句は、主語の位置を占めている場合には、非特定のと解釈されるが、主語以外の位置を占めている場合には、特定のである場合もあり、非特定のである場合もあるということがわかる。

3.3. 重複形+ゼロ限定詞

Soendjono Dardjowidjojo (1983) によれば、「犬は骨が好きである」という意味を表すインドネシア語は(74)であって、(75)は正しくないとう。

(74) Anjing suka tulang. 注23)

(75) *Anjing suka tulang-tulang. 注24)

‘suka’ という動詞は、総称的動詞なので、目的語に、総称的意味を有する名詞句を取らなければならない。(75)の例が非文であることから‘tulang-tulang’は、総称的意味を有していないことが分かる。

又、次の文も、先程述べた意味を表す文とならないので、‘anjing-anjing’ という重複形は、総称的意味を持ち得ないのだということが分かる。

(76) *Anjing-anjing suka tulang.

Soenjono Dardjowidjojo は、次の(77)のインドネシア語の文に対して、(78)のような英語の訳を与えていることから、この場合の重複形の 'murid-murid' は、日本語の「生徒達」に、ほぼ匹敵する意味を表していることがわかる。

(77) Murid-murid sedang membaca buku.

(78) The students are reading a book.

(74)の場合とは逆に、次の例では、総称的動詞ではない動詞の後ろに、重複形が現れている。

(79) Tempatkanlah barang-barang di tempatnya yang benar,
置け 物 ~に 場所 Ligature 正しい

maka mereka akan menempatkan kita di tempat yang
そうすれば それら ~だろう 置く 私達 ~に

benar. (アラブの諺) (Intisari No. 263, p. 124)

(物を正しい場所買いなさい、そうすれば物が私達を正しい場所に配置してくれる。)

(80) Kalau seseorang tidak mau mempunyai teman-teman
もし 誰か Negative ~したい 持つ 友人達

baru, maka ketika umurnya meningkat ia akan
新しい そうすれば ~時に (その人の)年令 増す 彼 ~だろう

sendirian. (Johnson) (Intisari No. 152, p.64)
一人ぼっち

(もし誰かが新しい友を作ろうとしなければ、年をとった時に一人ぼっちになる。)

このことも、重複形が総称的意味を有していないことの証左となる。

(77)の例から分かるように、重複形は、ある暗黙の裏に了解されている限界内で、その名称で呼ばれるもの全てを指す場合に使われる形であると言える。従って、もし、その名称で呼ばれるものの範囲を狭める暗黙裏に想定された限界が大きくなると、その重複形によって取り込まれる対象の数もそれにつ

れて大きくなるが、その場、その場で、その重複形が取り込むことができる対象の数は変動するので、常に、或るグループの集合全体の観念に直接到達する総称用法の名詞句とは異なっている。又、重複形は、それによって、具体的指示対象を想定させるが、総称用法の名詞句は、その集合全体の観念を想起させるにすぎないという相違点がある。重複形は、このように、ある暗黙裏の限界の存在を前提としているが、この想定される限界があまり明確でない場合には、重複形が取り込む対象の範囲も判然としない場合がある。例えば、次がその例である。

- (81) Pada hari raya itu ibu-ibu menyiapkan sesaji. Sesaji terdiri
～に 日 祭り その 母親達 準備する 供物 成り立つ
dari makanan dan bunga-bunga. Mereka membawa sesaji
～から 食べ物 種々の花 彼女達 持って行く
itu ke pura. (Ilmu Pengetahuan Sosial, p.90)
～へ 寺院

(その祭りの日には、母親達は供物の準備をする。供物は、食べ物と、色々な花から成っている。彼女達は、その供物を寺院へと持って行く。)

そして、この場合もそうであるが、次の例のように、暗黙裏に想定される限界が非常に広がる場合には、話者は指示対象の全てを認知し得るわけではないので、ある範囲に取り込まれる筈の対象の集合を漠然と思い描いて発言をしていることになる。従って、特定用法の不定名詞句とは異なり、指示対象を認知することが可能な場合もあれば、指示対象の数が多かったり、取り込まれるべき指示対象の範囲が曖昧模糊としているために認知が不可能となる場合もある。

- (82) Guru-guru bangsa kita semuanya sudah mengetahui belaka hal
先生達 民族 私達 全て 既に 知っている 全く 事
itu, tapi pura-pura tidak tahu saja. (Si Golok
その しかし 派りをする Negative 知っている だけ
Panjang, p. 31)

(私達の国の先生達は皆そのことをよく知っているのだが、唯、知らない派りをしているだけさ。)

4. インドネシア語の定名詞句

4.1. ituにより限定されるもの

第一章で観たように、英語では、次の文における定名詞句は、その指示性に関して二通りに曖昧である。一つの解釈は、話者がその定名詞句によって、ある特定の人物を想定しているような場合の解釈で、その際、話者はその特定の人物の名前の代りにその定名詞を用いていると言える。もう一つの解釈は、話者がその定名詞句によって、ある特定の人物を想定しているのではなく、「定名詞句の記述内容に合うような誰か」という意味でその定名詞が使用されている場合の解釈である。

- (83) I will take my revenge upon the man who murdered Mary.

しかし、この英文をインドネシア語に訳すと、指示的用法の場合には、指示形容詞の *itu* が付加されるが、限定的用法の場合には、*itu* は付加されない。次の(84)は、定名詞句が指示的に使用されている場合の訳文であり、(85)は、定名詞句が限定的に使用されている場合の訳文である。

- (84) Saya akan membalas dendam terhadap orang yang membunuh
Mary itu.

- (85) Saya akan membalas dendam terhadap orang yang membunuh
Mary.

次の文における 'perjaka yang hanya tamat SD itu' と、'bujangan yang

biasa mengantar dagangan ibunya ke pasar Cileumeuh itu' は、共に、その前に出てくる 'Samingun' を言い換えた表現であるので、この二つの定名詞句は指示的用法であり、どちらにも、指示形容詞の itu が付いている。

(86) Tak terlalu mulus, soalnya awalnya Samingun menolak.
 Negative 余りにも 良い (その)問題 最初 断る

Pemuda itu mengaku ngeri. “Bukan takut apa-apa, tapi
 若者 その 告白する 嫌だ Negative 恐れる しかし

saya rikuh dengan Mbak Karsinah”, tutur perjaka
 僕 打ち解けない ~と おばさん 言う 独身者

yang hanya tamat SD itu. Tapi, setelah dibujuk,
 Ligature 唯 卒業する 小学校 その ~後で 宥め賺される

akhirnya bujangan yang biasa mengantar dagangan ibunya
 終に 独裁者 通常 運ぶ 商品 (彼の)母親

ke pasar Cileumeuh itu menyerah. (Tempo 15 Juli 1989, p. 106)
 ~へ 市場 降参する

((その話し合いは) 余りうまくは運ばなんだ、つまり、最初、サミングンは「いや」だと言ったからだ。その若者は、「正直言って嫌だ」と言った。「別に何も恐いわけじゃないけれど、僕はカルシナおばさんとは打ち解けられないんだ」と、小学校しか出ていないその独り身の男は言った。しかし、宥め賺されて、終に、いつもは、母親が売る品物を C. 市場へ運ぶことを仕事にしているその独り者の若者は折れた。)

日本語でも、この場合、訳文にあるように、「その」という限定詞が付く。これによって、この限定詞が付いた定名詞句が旧情報であることが分かり、先行文脈に出てくる Samingun と結びつけることが可能となるわけである。尚、日本語では、限定詞「その」以外に、新情報である連体修飾節も、同じ名詞句に掛っていく場合には、新情報である連体修飾節は、「その+名詞句」の前に置かれるのが普通であろう。これに対して、インドネシア語の場合には、itu は必ず名詞句の一番最後に置かれることになるので、その前にくる修飾句や修飾節は旧情報の場合も、新情報の場合もあり得ることになる。今挙げた

例においては、ituと名詞句との間に狭まれた修飾節は、新情報となっている。

先に述べたように、限定的用法の定名詞句は、ituを取らないのを原則とするが、名詞句の主名詞以外の要素が旧情報のためにituによる限定を受ける時には、次に見られるように、限定的用法であってもituを取る定名詞句が現れる。

- (87) Menurut sumber Tempo, otak kejahatan itu diduga
～によれば 消息筋 頭目 犯罪 その 推測される
seorang oknum ABRI. (Tempo 10 Juni 1989, p.993)
一人の 人物 インドネシア国軍

(テンポ紙の伝える所によれば、その事件の首謀者は国軍所属の人物であろうと言われている。

この場合、事件の首謀者は未だ分かっていない状況の下での報道であるので、‘otak kejahatan itu’という定名詞句は、限定的用法であると言える。そして、限定詞のituの直接の掛り先は、旧情報である‘kejahatan’であって、‘otak’ではない。次の(89)に現れるituも、yangによって導かれる関係節内の内容が旧情報であるために付加されたと考えることができる。

- (88) Ini dia buku yang saya cari sejak lama
これ それ 本 Ligature 私 探す ～以来 長い
(これは、ずっと前から私が探していた本です。)

- (89) Ini dia buku yang saya cari sejak lama itu.
これ それ 本 Ligature 私 探す ～以来 長い その
(これが、ずっと前から私が探して言ってた本です。)

(88)、(89)の両文共、‘buku’を底名詞とする複合名詞句は、限定用法の定名詞句と考えられるが、最初のituが無い方の文は、この文の発話以前に、「私がある本を探している」ということについての言及が無かった場合に使用される文であるのに対して、二番目のituが有る方の文は、この文の発話以前に、「私がある本を探している」ということについての言及があった場合に使用される文である。

又、次の例における 'orang yang memecahkan vas bunga itu' という定名詞句は、限定的用法であると考えられるが、ここでも itu が現れている。これは、先行文脈に花瓶が壊された事が話題となっているので、問題の定名詞句の部分が、旧情報となっているために、旧情報を示す機能を有する itu が付加されていると考えられる。

- (90) Hanya yang saya tahu, orang yang memecahkan vas
 唯 Ligature 私 知っている 人 壊す 花
 bunga itu adalah seorang laki-laki yang di mana setiap
 瓶 その ~である 一人の 男 ~で そこ 毎
 bulan ibu sering meminta uang belanja kepadanya!", jawab si
 月 母 屢々 頼む お金 買物 彼に 答え
 anak. (Ketawa Awet Muda, p. 16)
 子供

(僕の知っていることといえば、花瓶を壊した人は、お母さんが毎月頻繁に買い物をするお金をねだっている男の人だってこと位だよ。)

次に、itu が付加された定名詞句が、その指示対象の存在を合意しない場合の用法、即ち、定名詞句の記述的用法について観てみよう。次に掲げるのは、いずれも、同格として用いられている定名詞句である。

- (91) ……tetapi ayah mereka, orang Yunani kelahiran Turki itu,
 しかし 父 彼等 人 ギリシャ 生まれ トルコ その
 selalu bepergian dengan paspor Argentina.
 常に 旅行する ~で パスポート アルゼンチン

(Intisari No. 306, p. 162)

(しかし、トルコ生まれのギリシャ人である彼等の父は、常に、アルゼンチンのパスポートを持って旅行していた。)

- (92) Maka, dengan leluasa Sampir, laki-laki itu, menyikat segepok
 かくして 自由に 男 その 攫う 一束
 uang yang persisnya Rp 5.363.000,00. (Tempo 19 Desember
 お金 Ligation 正確には 536万3千ルピア
 1987, p. 106)

(こうして、その男、即ちサムピルは、一束のお金、正確には、536万
 3千ルピアを悠然と奪い去った。)

しかし、同格の名詞句は、常にituによって限定されるわけではない。次の例
 は、先程の二つの例とは異なり、ituが現れていない。

- (93) …… lalu ia juga akrab aengan Reynaldo Herrera, jutawan
 それから 彼女 又 親密な ~と 百万長者
 minyak Venezuela yang tampan dan lebih muda dari
 石油 ベネズエラ Ligation ハンサム より 若い ~よりも
 Tina. (Intisari No. 306, p. 163)

(それから、彼女は、ハンサムで、ティナよりも若いベネズエラの石
 油王であるレイナルド・ヘレラと親密な間柄になった。)

ituの出現は、同格の名詞句の対となる語句が新情報であるか、旧情報である
 かという事と深く関わっている。即ち、同格の名詞句の対となっている語句が
 新情報である場合には、ituが現れないが、同格の名詞句の対となっている語
 句が旧情報である場合には、ituが現れると言える。(91)における‘ayah mereka’
 は、先行文脈で既に言及がある人物なので、旧情報である。従って、‘ayah
 mereka’に続く同格節には、上記原則によって、限定詞のituが付加されるこ
 とになる。

しかし乍ら、(92)の例における‘itu’の出現は、先程の原則では説明がつかない。
 というのは、この記事は、次のような書き出しで始まり、誰かが浴室に
 しのびこんだことについては述べられているが、‘Sampir’という人名は先行
 する文脈では現れていない。

- (94) SATPAM itu mengunci piutu, ketika seseorang meunelinap ke
ガードマン その 施錠する 扉 ~時 誰か しのび込む ~へ
kamar mandi.……(Tempo 19 Desember 1987. p. 106)
浴室

(そのガードマンが扉に鍵をかけている時に、誰かが浴室にしのび込んだ。)

ここでは、(91)の場合とは逆に、同格節は、先行文脈に現れた'seseorang'を承けているので、旧情報となっている。つまり、この文は、例えば、次のような文を省いて、一足跳びに、先行文脈の人物を承けると同時にその名前も同時に提示したために生じた文であると考えられる。

- (95) Laki-laki itu bernama Sampir.
その ~という名前である

(その男はサムピルという名前である。)

ituを伴う定名詞句が記述的に用いられるもう一つのケースは、次のように、総称的意味で使用される場合である。

- (96) Kuda itu adalah binatang.
馬 その ~である 動物

(馬は動物である。)

日本語では、名詞を総称的意味で使用する時には、ゼロ限定詞が付加された形にしなければならず、インドネシア語のように指示形容詞を限定詞にとる形は使われない。しかし、ここで付け加えておかなければならないのは、インドネシア語では、総称的意味を表そうとする時には、常に指示形容詞のituが必要かという点、必ずしもそうとは限らないということである。即ち、次のように、ゼロ限定詞が付加された形でも同様の意味を表し得る。

- (97) Kuda adalah binatang.

4.2. ゼロ限定詞

前節でも述べたように、限定的定名詞句は、それ全体か、或はその一部が旧情報となっている場合を除き、原則として、ituによる限定を受けないと言

える。例えば、次の例における‘pembunuh Lina’や‘pembunuh’は、未だ犯人が逮捕されていない段階での話であるから、話者が、それによって、特定の人物を想定しているとは考えられない。従って、これらの名詞句は、限定的的に用いられていることは明らかである。そして、兩名詞句とも、ituによる限定を受けていないことに注意してもらいたい。

- (98) Seperti pelaku yang menyiram ketiga gadis di Cilandak
 ~のように 犯人 Ligature 撒く 三人の 娘 ~で
 itu, hingga sekarang pembunuh Lina juga tidak terungkap.
 その ~迄 今 殺人者 又 Negative 明らかになった
 Pihak Polda Metro Jaya sampai pekan ini masih menyelidiki
 当局 市警察 ジャカルタ ~迄 週 この 未だ 調べる
 pelaku yang menyiram Oca, Titin, dan Sarah. Siapa tahu
 Ligature ~かも知れない
 pelakunya memang orang sinting yang tak senang melihat
 本当に 人 頭が変な Negative 嬉しい 見る
 gadis berwajah cantik. (Tempo 30 April 1988, p. 102)
 ~の顔をしている 美しい

(チランダックで三人の娘に(薬品を)浴びせた犯人と同じく、リナを殺した犯人も今日迄明らかとなっていない。ジャカルタ市警察は、今週になっても未だ、オチャ、ティティンそれにサラに(薬品を)振りかけた犯人の調査を進めている。犯人は、本当に頭がおかしくて、きれいな娘を見ると癪にさわるような奴かも知れない。)

- (99) Mungkin sekali pembunuh menyiapkan hal itu pada saat Sep
 多分 大いに 殺人犯 準備する 事 その ~に 時
 bertengkar dengan putri dan istrinya, yaitu setelah Arthur
 喧嘩する ~と 娘 及び (彼の)妻 即ち ~の後で
 berangkat. (Intisari No. 313, p. 80)
 出発する

(恐らく、殺人犯は、セプティムス・トックスが娘と奥さんを相手に争いをしていた時、即ち、アーサーが出掛けた後で、その準備をしたの

だろう。)

しかし、(98)の 'seperti pelaku yang menyiram ketiga gadis di Cilandak itu' の中にituが出てくるのは、どう説明すればいいのだろう。このituは、旧情報である 'ketiga gadis di Cilandak' に掛っていると考えればよいのではないだろうか。

以上の例とは異なり、既に犯人が逮捕され、犯人が誰であるかがはっきりしている場合には、次の例における 'penjahat itu' のように、ituによる限定を受けることができる。

- (100) Sebab, penjahat itu yang dalam beraksi selalu
 というのは 犯人 その Ligature ~中に 活動する 常に

bersenjata api, tak segan-segan menembak bila korban
武器を携えている Negative 躊躇する 撃つ ~時 被害者

tak menyerahkan uangnya. (Tempo 30 April, 1988)
Negative 渡す (その人の)お金

(というのは、その犯人は、悪事を働く時には常に武器を携えていて、被害者が金を渡さない時には、容赦なく撃つからだ。)

この文に先行する部分には、次のような一文があり、既にこの事件の犯人の正体が分かっていることが明らかである。

- (101) Berdasarkan pengakuan mereka, polisi menciduk semua anggota
 ~に基づいて 自由 彼等 警察 取り押える 全ての メンバー

komplotan, termasuk otaknya, Eko S. (Tempo 30 April, 1988
一味 ~を含む 首謀者

p. 103)

(彼等の自供に基づいて、警察は、首謀者の Eko S. を含むその一味全員を取り押えた。)

次に、限定詞のituが付加された定名詞句と全く同様に扱うことができるゼロ限定詞付きの定名詞句について観てみる。

Soenjono Dardjowidjojo (1983) においては、(102) のような me-形の

目的語は、不定でもよいが、この目的語を文頭に置いた場合には、(103)のように、定であることを表示するものが無い形は非文となるという主張がなされている。即ち、Soenjono Dardjowidjojoによれば、目的語が前置した構文の主語は、定を表示する何らかの限定詞——例えば、ituとか-nyaのような——を伴っている必要があり、何の限定詞も取らない形は、総称的な意味でその名詞句が使用される場合を除いてはあり得ないということである。

(102) Anak perempuan itu memegang meja
子供 女 その 捉まる 机

(その女の子は机に捉まっている。)

(103) *Meja dipegang oleh anak perempuan itu.

確かに、(103)のような文を、前後の文脈を捨象して考えれば、認められない形と言えるかもしれないが、次のように、ゼロ限定詞付きの定名詞句‘bebek’が、‘bebek itu’と全く同じように使われている例があるので、Soenjono Dardjowidjojoの主張は、無条件で正しいと言うわけにはいかず、(104)のような場合も説明できるためには、修正が必要であろう。

(104) Dua minggu lebih bebek tersebut raib. Tapi polisi yang
二 週 以上 あひる 前述の 消える しかし 警察官 Ligature
berdisiplin tinggi itu tak putus asa. Bebek ditemukan
規律を持った 高い その Negative 希望を失う 発見された
di desa tetangga. (Tempo 6 Mei 1989, p. 100)
~で 村 隣り

(二週間以上も、そのあひるは行方が知れなかった。しかし、厳しい規律を身につけたその警察官は希望を失わなかった。あひるは隣り村で発見された。)

従って、インドネシア語では、ゼロ限定詞付きの名詞句も定名詞句として使用される場合があると言える。同じことは、日本語についても当て嵌まる。次の例において、ゼロ限定詞付きの名詞句「青年」は二回現れるが、いずれもその前の文脈で現れる「その青年」と同資格の定名詞句とみなすことができ

る。

- (105) 「…一月のある日、橋の欄干から飛び降り自殺を図ろうとしたところ、日本人の青年に助けられた。その青年は新聞で私のことを知ったといい、金を貸してくれたうえ、自分のパスポートで逃げなさいとってくれた」

—どのようなコースで脱出を図ったのか。

「上海は公安にマークされているので、一月十三日早朝、汽車で広州に行き、そこで野宿した。公安当局にたくさん写真を撮られており、青年とは年も顔も違うので、検問のたび『もう、これでおしまいか』と生きた心地がしなかった。広州から船に乗り、香港に入った。そこで青年に郵便でパスポートを返送…」

(朝日新聞朝刊 平成元年二月四日 第三十一面)

又、ある集団の共有知識体系の中で、その存在が一つに限られるものを指す場合には、インドネシア語では、ゼロ限定詞付きの名詞句を使用するのが普通である。次はその例である。

- (106) Lepas tengah hari, udara bukan main panasnya. Matahari

過ぎる 真中 白 空気 大変なものである その暑さ 太陽

bersinar terik. (Bobo 9 September 1989, p. 5)

輝く かんかんと

(昼を過ぎると、大変な暑さになる。そして太陽がかんかんと照りつける。)

- (107) Ketika sedang asyik melihat bulan dan binatang, tiba-tiba

～時 最中 夢中で 眺める 月 星 突然

bulan tertutup awan. (Bobo 15 Juli 1989, p. 34)

閉ざされる 雲

(じっと月と星を眺めていたら、突然、月が雲に隠れてしまった。)

(108) "... Karena saya tahu pasti bahwa pemerintah
 というのは 私 知っている 確かに ~ということ 政府

juga akan mengatakan pusing dan berat dalam
も又 ~だろう 言う 頭が痛い そして 困難な ~に際して

mengatur rumah tangga negaranya" (Banyolan Antar Kita,
運営する 所帯 その国

p. 12)

(というのは、政府だって、国家の運営は困難な仕事で頭を悩ませるものであると言うに決まっているからだ。)

こういう類の定名詞句が、ituによって限定されることはない。

ゼロ限定詞を伴う名詞句には、次の例に見られるような、存在を含意しない記述的用法もある。

(109) Tina yang lahir dan dibesarkan di Inggris, merasa
 Ligature 生まれる そして 育てられる ~で イギリス 感じる

perlu mendidik anaknya secara orang Inggris kaya,
必要な 教育する (彼女の)子供 ~のように 人 富裕な

yaitu dengan diserahkan kepada pembantu.(Intisari No. 302,
即ち ~でもって 預けられる ~で 手伝い

p.162)

(イギリスで生まれ育ったクリスチナは、子供を上流階級のイギリス人流に、即ち、養育係に子供を預ける方法で、教育する必要があると感じた。)

(110) Tina sebagai anak orang kaya yang bersuamikan orang
 ~として 子供 人 富裕な Ligature ~を夫を持つ

kaya pula, sering masuk koran dan majalah seperti
又 しばしば 入る 新聞 雑誌 ~のように

teman-teman sepergaulannya. (Intisari Januari 1989,
友人 彼女が付き合っている

p. 162)

(クリスチナは金持ちの子供でもあり、又、金持ちの夫を持つ人物

でもあったので、彼女の社交界での仲間達と同様に、しばしば新聞や雑誌に登場した。)

注

1. 武田修一 (1977)
2. *ibid.*
3. *ibid.*
4. *ibid.*
5. 武田修一 (1979), p. 41
6. 武田修一 (1981), p. 2
7. *idid.* pp. 3—4
8. *idid.* p. 9
9. *loc. cit.*
10. 武田修一 (1977)
11. *ibid.*
12. *ibid.*
13. *ibid.*
14. *ibid.*
15. Soenjono Dardjo widjojo (1983), p. 212
16. *ibid.* p. 222
17. *loc. cit.*
18. *ibid.* p. 214
19. *loc. cit.*
20. Soenjono Dardjowidjojo (1983), p. 212
21. *idid.* p. 222
22. 訳文が原文と少し異なっているので、ここでは訳文を忠実に訳すことにした。
23. Soenjono Dardjowidjojo (1983), p. 208
24. *loc. cit.*

参 考 文 献

1. Ioup, Georgette. (1977) "Specificity and the Interpretation of Quantifiers," *Linguistics and Philosophy* 1, 233—245.
2. Dardjowidjojo, Soenjono. (1983) *Beberapa Aspek Linguistik Indonesia*, Penerbit Djambatan, Jakarta.

3. Donnellan, Keith. (1971) "Reference and Definite Descriptions," in Danny S. Steinberg and Leon A. Jakobovits, eds., *Semantics*, Cambridge University Press, London.
4. Donnellan, Keith. (1978) "Speaker Reference, Descriptions, and Anaphora,"
5. Palacas, Arthur L. (1977) "Specificness in Generative Grammar," in p. J. Hopper (ed.), *Studies in Descriptive and Historical Linguistics: Festschrift for Winfred P. Lehmann*, John Beujawins, Amsterdam.
in Peter Cole, ed., *Syntax and Semantics* 9, 47-68.
6. Partee, B. H. (1972) "Opacity, Coreference and Pronouns," in D. Davidson and G. Harman, eds., *Semantics of Natural Language* 415-441, D. Reidel Publishing, Dordrecht.
7. Peterson, D.J. (1975) *Noun Phrase Specificity*, Xerox University Microfilms, Ann Arbor.
8. Takeda, Shuichi. (1977) 「限量化と不定冠詞について——特に総称不定冠詞の機能をめぐって——」, 『英語学』 17, 23-45, 開拓社, 東京.
9. Takeda, Shuichi. (1979) 「特定性と指示性の関係について」, 『英語学』 21, 2-27, 開拓社, 東京.
10. Takeda, Shuichi. (1981) *Reference and Noun Phrases*, Liber Press, Tokyo.
11. Takeda, Shuichi. (1987) 『英語意味論の基礎的研究』, リーベル出版, 東京.